

Contents

1	初めての駅	2
2	窓際のトットちゃん	4
3	新しい学校	11

Chapter1 初めての駅

じゆう おか えき おおいまちせん お
自由が丘の駅で、大井町線から降りると、ママは、トットちゃんの手を
ひ ば かいさつぐち で
引っ張って、改札口を出ようとした。トットちゃんは、それまで、あまり
でんしゃ の
電車に乗ったことがなかったから、大切に握っていたきっぷをあげちゃうの
は、もったいないなと思った。

そこで、かいさつぐちのおじさんに、「このきっぷ、もらっちゃいけない？」と
き聞いた。おじさんは「ダメだよ」というと、トットちゃんの手から、きっぷを
と あ かいさつぐち はこ た きっぷ
取り上げた。トットちゃんは、改札口の箱にいっぱい溜まっている切符を
さしてき聞いた。「これ、ぜんぶ、おじさんの？」おじさんは、ほか で い ひと
のきっぷをひったくりながらこたえた。「おじさんのじゃないよ、えき
のだから」
「へーえ……」トットちゃんは、みれんはこ のぞ こ い
「私、大人になったら、きっぷをうひと ひと おも
「私、大人になったら、切符を売る人になろうと思うわ」おじさんは、はじ
めて、トットちゃんをチラリと見て、いった。「うちの おとこ こ えき はたら
きたいて、いってるから、いっしょ
きたいって、いってるから、一緒にやるといいよ」

トットちゃんは、すこ はな み ふと
トットちゃんは、少し離れて、おじさんを見た。おじさんは肥っていて、
めがね
眼鏡をかけていて、よくみると、やさしそうなのところもあった。「ふん……」
トットちゃんは、て こし あ かんさつ い
トットちゃんは、手を腰に当てて、観察しながら言った。「おじさんとこの
こ いっしょ
子と、一緒にやってもいいけど、かんがえとくわ。あたし、これから あたら
学校に行くんで、忙しいから」そういうと、トットちゃんは、ま
ママのところに走っていった。そして、こうさけ
マのところに走っていった。そして、こう叫んだ。「わたし きっぷや
「私、切符屋さんにな

ろうと思うんだ！」ママは、驚きもしないで、いった。「でも、スパイになるって言ってたのは、どうするの？」

トットちゃんは、ママに手を取られて歩き出しながら、考えた。(そう
だわ。昨日までは、絶対にスパイになろう、って決めてたのに。でも、いま
の切符をいっぱい箱にしまっておく人になるのも、とても、いいと思うわ)
「そうだ！」トットちゃんは、いいことを思いついて、ママの顔をのぞきな
がら、大声をはりあげていった。「ねえ、本当はスパイなんだけど、切符屋
さんなのは、どう？」ママは答えなかった。

本当のことを言うと、ママはとても不安だったのだ。もし、これから行
く小学校で、トットちゃんのことを、あずかってくれなかったら……。小
さい花のついた、フェルトの帽子をかぶっている、ママの、きれいな顔が、
少ししまじめになった。そして、道を飛び跳ねながら、何かを早口でしゃべっ
てるトットちゃんを見た。トットちゃんは、ママの心配を知らなかったか
ら、顔があうと、うれしそうに笑っていった。「ねえ、私、やっぱり、どっ
ちもやめて、チンドン屋さんになる！！」ママは、多少、絶望的な気分で
いった。「さあ、遅れるわ。校長先生が待ってらっしゃるんだから。もう、
おしゃべりしないで、前を向いて、歩いてちょうだい」二人の目の前に、小
さい学校の門が見えてきた。

Chapter2 窓際のトットちゃん

あたらしい学校の門をくぐる前に、トットちゃんのママが、なぜ不安なのかを説明すると、それはトットちゃんが、小学校一年なのにかかわらず、すでに学校を退学になったからだった。一年生で!!

つい先週のことだった。ママはトットちゃんの担任の先生に呼ばれて、はっきり、こういわれた。

「お宅のお嬢さんがいると、クラス中の迷惑になります。よその学校にお連れください!」若くて美しい女の先生は、ため息をつきながら、繰り返した。「本当に困ってるんです!」ママはびっくりした。(一体、どんなことを……。クラス中の迷惑になる、どんなことを、あの子がするんだろうか……)

先生は、カールしたまつ毛をパチパチさせ、パーマのかかった短い内巻の毛を手でなでながら説明に取り掛かった。

「まず、授業中に、机のフタを、百ぺんくらい、あけたり閉めたりするんです。そこで私が、用事がないのに、開けたり閉めたりしてはいけませんと申しますと、お宅のお嬢さんは、ノートから、筆箱、教科書、全部を机の中にしまってしまって、一つ一つ取り出すんです。たとえば、書き取りをするとしますね。するとお嬢さんは、まずフタを開けて、ノートを取り出した、と思うが早いか、パタン! とフタを閉めてしまいます。そして、すぐにまた開けて頭を中につっこんで筆箱から“ア”を書くための

えんぴつ^だを出すと、急い^{いそ}で閉め^して、“ア”を書^かきます。ところが、うまく書^かけな
かったり間違^{まちが}えたりしますね。そうすると、フタを開^あけて、また頭^{あたま}を突^つ
こ^こんで、消^けしゴム^{ごむ}をだ^し、閉め^しると、急い^{いそ}で消^けしゴム^{ごむ}を使^{つか}い、次^{つぎ}に、すごい
はや^{はや}さで開^あけて、消^けしゴム^{ごむ}をし^しまって、フタを閉め^してしまいます。で、すぐ、
また開^あけるので見^みてますと、“ア”ひとつだけ書^かいて、道具^{どうぐ}をひとつひとつ、
ぜんぶ^{ぜんぶ}しま^しうんです。鉛筆^{えんぴつ}をし^しまい、閉め^して、また開^あけてノートをし^しまい……
というふう^{ふう}に。そして、次^{つぎ}の“イ”のとき^{とき}に、また、ノートから始^{はじ}まって、
鉛筆^{えんぴつ}、消^けしゴム^{ごむ}……その度^{たび}に、私^{わたし}の目^めの前^{まえ}で、目まぐるしく、机^{つくえ}のフタ
がひら^{ひら}いたり閉^しまったり。私^{わたし}、目^めが回^{まわ}るんです。でも、一応^{いちおう}、用事^{ようじ}があるん
ですから、いけ^{もう}ないとは申^{せん}せませんけど……」先生^{せんせい}のまつ毛^げが、その時^{とき}を
おも^{おも}だ^だしたように、パチパチと早^{はや}くなった。

そこで聞^きいて、ママには、トットちゃん^{トットちゃん}が、なんで、学校^{がっこう}の机^{つくえ}を、そ
んなに開^あけたり閉^しめたりするの^のか、ちょっとわか^わかった。というの^のは、初^{はじ}めて
学校^{がっこう}に行^いって帰^{かえ}ってきた日^ひに、トットちゃん^{トットちゃん}が、ひどく興^{こう}奮^{ふん}して、こうマ
マに報^{ほう}告^{こく}したことをおも^{おも}だ^だしたからだ^だった。「ねえ、学校^{がっこう}って、すごい^の。
いえ、つくえ^{つくえ}のひ^ひだ^だしは、こんな風^{ふう}に、引^ひ張^ばるの^のだけ^{だけ}ど、学校^{がっこう}のはフタ^{うえ}が上
にあ^あがる^の。ゴミ箱^{ごみばこ}のフタ^{おな}と同じ^{おな}なんだ^のけど、も^もっとツルツルで、いろん^{いろん}な
もの^{もの}が、しま^{しま}えて、と^とってもいい^{いい}んだ！」ママには、今^{いま}まで見^みたこと^{こと}のない
机^{つくえ}の前^{まえ}で、トットちゃん^{トットちゃん}が面^{おも}白^{しろ}が^がって、開^あけたり閉^しめたりして^{ようす}る様^{ようす}子が目
にみ^みえるよう^{よう}だ^だった。そして、それ^{それ}は、(そん^{そん}なに悪^{わる}いこと^{こと}では^{では}ないし、第^{だい}
一^{いち}、だ^だんだ^だん馴^なれてくれ^{くれ}ば、そん^{そん}なに開^あけたり閉^しめたりし^しなくなる^{なくなる}だ^だらう)と
かん^{かん}が^がえ^えた^たけど、先生^{せんせい}には、「よく注^{ちゅう}意^いし^します^{ます}から」とい^いった。ところが、先生^{せんせい}
には、それ^{それ}までの調^{ちょう}子^しより声^{こえ}をもう^{もう}すこ^{すこ}し高^{たか}く^くして、こ^こうい^いった。「それ^{それ}だ

けなら、よろしいんですけど！」ママは、すこし身がちぢむような気がした。先生は、体を少し前にのり出すといった。「机で音を立ててないな、と思うと、今度は、授業中、立ってるんです。ずーっと！」ママは、またびっくりしたので聞いた。「立ってるって、どこにでございましょうか？」先生はすこし怒った風にいった。「教室の窓のところですよ！」ママは、わけがわからないので、続けて質問した。「窓のところで、何をしてるんでしょうか？」先生は、半分、叫ぶような声で言った。「チンドン屋を呼び込むためです。」

先生の話を、まとめて見ると、こういうことになるらしかった。一時間目に、机をパタパタを、かなりやると、それ以後は、机を離れて、窓のところに立って外を見ている。そこで、静かにしてしてくれるのなら、立っててもいい、と先生が思った矢先に、突然、トットちゃんは、大きい声で「チンドン屋さん！」と外に向かって叫んだ。だいたい、この教室の窓というのが、トットちゃんにとっては幸福なことに、先生にとっては不幸なことに、1階にあり、しかも通りは目の前だった。そして境といえば、低い、生垣があるだけだったから、トットちゃんは、簡単に、通りを歩いている人と、話ができるわけだったのだ。さて、通りかかったチンドン屋さんは、呼ばれたから教室の下まで来る。するとトットちゃんは、うれしそうに、クラス中の皆に呼びかけた。「来たわよー」。勉強してたクラス中の子供は、全員、その声で窓のところに、詰め掛けて、口々に叫ぶ。「チンドン屋さん」。すると、トットちゃんは、チンドン屋さんに頼む。「ねえ、ちょっとだけで、やってみて？」学校のそばを通る時は、音をおさえめにしているチンドン屋さんも、せっかくの頼みだからというので盛大に始め

る。クラスネットや鉦^{かね}や太鼓^{たいこ}や、三味線^{さみせん}で。その間^{あいだ}、先生^{せんせい}がどうしてるか、
といえ^いば、一段落^{いちだんらく}つくまで、ひとり教壇^{きょうだん}で、ジーっと待^まってるしかない。
(この一曲^{きょく}が終^おわるまでの辛抱^{しんぼう}なんだから)と自分^{じぶん}に言^い聞^きかせながら。

さて、一曲^{きょく}終^おわると、チンドン屋^やさんは去^さって行^いき、生徒^{せいと}たちは、それ
ぞれ^{せき}の席^{もど}に^{おどろ}驚^{おどろ}いたこと^に、トットちゃん^{まど}は、窓^{まど}の^{うご}ところ^とから動^{うご}かない。「どうして、まだ、そこにいるのですか？」という先生^{せんせい}の問^と
い^に、トットちゃん^{おおまじめ}は、大真面目^{こた}に答^{こた}えた。「だ^{ちが}って、また違^{ちが}うチンドン屋^や
さん^きが来^きたら、お^{はなし}話^{はなし}しな^ききゃ^{はなし}ならないし。それから、さ^きっきのチンドン屋^や
さん^{もど}が、また、戻^{もど}って^{たいへん}きたら、大^{たいへん}変^{へん}だからです。」

「これ^{じゅぎょう}じゃ、授^{じゅぎょう}業^{ぎょう}にな^{はな}らない、とい^いうこ^ことが、お^おわ^わかりで^{はな}しょう？」話^{はな}
して^いるう^いちに、先生^{せんせい}は、か^{かん}なり感^{かん}情^{じょう}的^{てき}な^いって^いきて、マ^いマ^いに言^いった。マ^いマ^いは、
(なる^いほど、これ^いでは先生^{せんせい}も、お^{こま}困^{こま}り^{おも}だ^{おも}わ)と思^{おも}い^{おも}か^{おも}けた。と^{せんせい}たん、先生^{せんせい}
は、また一段^{いちだん}と大^{おお}き^{こえ}な声^{こえ}で、こ^こうい^いった。「それ^いに……」マ^いマ^いはび^いっ^いくりし
な^なが^なら^なも、情^{なさ}け^{なさ}ない思^{おも}い^{おも}出^で先生^{せんせい}に^き聞^きいた。「まだ、あ^ある^あん^あで^あご^ござ^ざい^いま^あし^あしょう
か……」先生^{せんせい}は、す^すぐ^ぐい^いった。「“まだ”とい^いう^いよう^いに、数^{かず}え^えら^えれる^えく^くらい
なら、こ^こう^こや^やって、や^やめ^めて^てい^いた^ただ^だき^きたい、と^{ねが}お^お願^{ねが}い^いは^はし^しま^ません!!」それ^{それ}から
先生^{せんせい}は、少^すし^し息^{いき}を^{しず}静^{しず}めて、マ^かマ^かの^み顔^いを^い見^きて^{のう}言^うった。「昨^{きのう}日^うの^うこ^こと^とです^すが、例^{れい}
に^によ^よって、窓^{まど}の^たと^たころ^とに^や立^たっ^{おも}て^{おも}い^いる^{じゅぎょう}ので、またチンドン屋^やだ^だと思^{おも}っ^{おも}て^{おも} 授^{じゅぎょう}業^{ぎょう}
を^をし^して^しお^おり^{こえ}ま^{こえ}し^{こえ}たら、こ^これ^こが、また大^{おお}き^{こえ}な声^{こえ}で、い^いき^いなり、『何^{なに}し^して^てる^の?』
と、誰^{だれ}か^かに、何^{なに}か^きを^を聞^きい^あて^あい^いて^いる^いん^いです^すね。相^あ手^ては、私^{わたし}の^のほう^{ほう}から^み見^みえ^えま^ません
ので、誰^{だれ}だ^だら^らう、と^{おも}思^{おも}っ^{おも}て^{おも}お^おり^{こえ}ま^{こえ}す^すと、また大^{おお}き^{こえ}な声^{こえ}で、『ね^{なに}え、何^{なに}を^をし^して^て
る^の?』^{って}。それ^{それ}も、今^{こんど}度^どは、通^{とお}り^うに^うで^えなく、上^うの^むほう^{ほう}に^き向^むか^かっ^きて^き聞^きい^いて^てる^る
ん^んです^す。私^{わたし}も^き気^きに^あい^いて^いな^いり^いま^いして、相^あ手^ての^{へん}返^{へん}事^じが^き聞^きこ^きえ^える^るか^かした、と^み耳^みを^す澄^すまし

てみましたが、返事がないんです。お嬢さんは、それでも、さかんに、『ねえ、何してるの?』を続けるので、授業にもさしさわりがあるので、窓のところに行って、お嬢さんの話しかけてる相手が誰なのか、見てみようとおもいました。窓から顔を出して上を見ましたら、なんと、つばめが、教室の屋根の下に、巣を作っているんです。その、つばめに聞いているんですね。そりゃ私も、子供の気持ちが、わからないわけじゃありませんから、つばめに聞いていることを、馬鹿げている、とは申しません。授業中に、あんな声で、つばめに、『何をしてるのか?』と聞かなくてもいいと、私は思うんです」そして先生は、ママが、一体なんとお詫びをしよう、と口を開きかけたのより、早く言った。「それから、こういうことも、ございました。初めての図画の時間のことですが、国旗を描いて御覧なさい、と私が申しましたら、他の子は、画用紙に、ちゃんと日の丸を描いたんですが、お宅のお嬢さんは、朝日新聞の模様のような、軍艦旗を描き始めました。それなら、それでいい、と思ってましたら、突然、旗の周りに、ふさを、つけ始めたんです。ふさ。よく青年団とか、そういった旗についてます。あの、ふさです。で、それも、まあ、どこかで見たのだろうから、とおもっておりました。ところが、ちょっと目を離したキスに、まあ、黄色のふさを、机にまで、どんどん描いちゃってるんです。だいたい画用紙に、ほぼいっぱい旗を描いたんですから、ふさの余裕は、もともと、あまりなかったんですが、それに、黄色のクレヨンで、ゴシゴシふさを描いたんですね。それが、はみだしちゃって、画用紙をどかしたら、机に、ひどい黄色のギザギザが残ってしまっ、ふいても、こすっても、とれません。まあ、幸いなことは、ギザギザが三方向だけだった、ってことでしょうか?」ママは、ちぢこまりなが

らも、^{いそ}急いで^{しつもん}質問した。「^{さんぼうむか}三方向^{せんせい}って^{つか}いうのは……」先生は、そろそろ疲れてきた、という^{ようす}様子だったが、それでも^{しんせつ}親切に^{はたざお ひだり}いった。「旗竿を^{えが}左^{はた}はじに^{さんぼう}描きましたから、旗のギザギザは、三方^{さんぼう}だけだったんでございます」ママは、^{すこ たす}少し助^{おも}かった、と思って、「はあ、それで^{さんぼう}三方^{さんぼう}だけ……」といった。すると、^{せんせい}先生は、^{つぎ}次に、^{くちょう}とっても、^{ひとこと}ゆっくりの^{くぎ}口調で、一言ずつ^{くぎ}区切^{くぎ}って「ただし、その^か代わり、^{はたざお}旗竿^{つくえ}のはじが、やはり、机^だに、はみ^{のこ}出して、残^{のこ}っております!!」それから^{せんせい}先生は^{た あ}立ち上^あがると、かなり^{つめ}冷たい^{かん}感じで、とどめをさすように^い言った。「それと、^{めいわく}迷惑^{わたし}しているのは、私^{わたし}だけでは^{となり}ございませ^{なり}ん。隣^{となり}の^{いちねんせい}一年生^{う も}の^{せんせい}受け持^{こま}ちの先生も^{こま}お困^{こま}りのことが、ある^{こま}そうですから……」ママは、^{けっしん}決心^{たし}しないわけには、い^{たし}かなか^{ほか}った。^{ほか}(確^{たし}かに、これ^{ほか}じゃ、^{せいと}他の^{せいと}生徒^{せいと}さんに、^{めいわく}ご迷^{めいわく}惑^{めいわく}すぎる。どこ^{ほか}か、^{がっこう}他の^{さが}学校^{うつ}を探^{うつ}して、^{うつ}移^{うつ}した^{うつ}ほうが、よさ^{うつ}そう^{うつ}だ。何^{なん}とか、^こあの^こ子^この^こ性^こ格^こが^こわ^こか^こって^こいた^こだ^こだけ^こて、^{みな}皆^{みな}と^{みな}一^{みな}緒^{みな}に^{みな}や^{みな}っ^{みな}て^{みな}い^{みな}く^{みな}こ^{みな}と^{みな}を^{みな}教^{みな}え^{みな}て^{みな}く^{みな}だ^{みな}さ^{みな}る^{みな}よ^{みな}う^{みな}な^{みな}学^{みな}校^{みな}に^{みな}……) ^{おし}そう^{おし}し^{おし}て、^{おし}ママ^{おし}が、^{おし}あ^{おし}っ^{おし}ち^{おし}こ^{おし}っ^{おし}ち、^{おし}か^{おし}け^{おし}ず^{おし}り^{おし}ま^{おし}わ^{おし}っ^{おし}て^{おし}見^{おし}つ^{おし}け^{おし}た^{おし}の^{おし}が、^{おし}こ^{おし}れ^{おし}か^{おし}ら^{おし}行^{おし}こ^{おし}う^{おし}と^{おし}し^{おし}て^{おし}い^{おし}る^{おし}学^{おし}校^{おし}、^{おし}と^{おし}い^{おし}う^{おし}わ^{おし}け^{おし}だ^{おし}っ^{おし}た^{おし}の^{おし}だ。ママは、^{おし}こ^{おし}の^{おし}退^{おし}学^{おし}の^{おし}こ^{おし}と^{おし}を、^{おし}ト^{おし}ット^{おし}ち^{おし}ゃ^{おし}ん^{おし}に^{おし}話^{おし}し^{おし}て^{おし}い^{おし}な^{おし}か^{おし}った。話^{おし}し^{おし}て^{おし}も、^{おし}何^{おし}が^{おし}い^{おし}け^{おし}な^{おし}か^{おし}った^{おし}の^{おし}か、^{おし}わ^{おし}か^{おし}ら^{おし}な^{おし}い^{おし}だ^{おし}ら^{おし}う^{おし}し、^{おし}ま^{おし}た^{おし}、^{おし}そ^{おし}ん^{おし}な^{おし}に^{おし}こ^{おし}と^{おし}で、^{おし}ト^{おし}ット^{おし}ち^{おし}ゃ^{おし}ん^{おし}が、^{おし}コ^{おし}ン^{おし}プ^{おし}レ^{おし}ク^{おし}ス^{おし}を^{おし}持^{おし}つ^{おし}の^{おし}も、^{おし}よ^{おし}く^{おし}な^{おし}い^{おし}と^{おし}お^{おし}も^{おし}思^{おし}っ^{おし}た^{おし}か^{おし}ら、^{おし}(い^{おし}つ^{おし}か、^{おし}大^{おし}き^{おし}く^{おし}な^{おし}っ^{おし}た^{おし}ら、^{おし}話^{おし}し^{おし}ま^{おし}し^{おし}よ^{おし}う^{おし}) ^{おし}と、^{おし}き^{おし}め^{おし}て^{おし}い^{おし}た。た^{おし}だ、^{おし}ト^{おし}ット^{おし}ち^{おし}ゃ^{おし}ん^{おし}に^{おし}は、^{おし}こ^{おし}う^{おし}い^{おし}っ^{おし}た。「^{おし}新^{おし}しい^{おし}学^{おし}校^{おし}に^{おし}行^{おし}っ^{おし}て^{おし}み^{おし}な^{おし}い？ ^{おし}い^{おし}い^{おし}が^{おし}っ^{おし}こ^{おし}う^{おし}だ^{おし}っ^{おし}て^{おし}話^{おし}よ」^{おし}ト^{おし}ット^{おし}ち^{おし}ゃ^{おし}ん^{おし}は、^{おし}少^{おし}し^{おし}考^{おし}え^{おし}て^{おし}か^{おし}ら、^{おし}言^{おし}っ^{おし}た。「^{おし}行^{おし}く^{おし}け^{おし}ど^{おし}……」^{おし}ママ^{おし}は、^{おし}(こ^{おし}の^{おし}子^{おし}は、^{おし}今^{おし}何^{おし}を^{おし}考^{おし}え^{おし}て^{おし}る^{おし}の^{おし}だ^{おし}ら^{おし}う^{おし}か) ^{おし}と^{おし}思^{おし}っ^{おし}た。^{おし}(う^{おし}す^{おし}う^{おし}す、^{おし}退^{おし}学^{おし}の^{おし}こ^{おし}と、^{おし}気^{おし}が^{おし}つ^{おし}い^{おし}て^{おし}い^{おし}た^{おし}ん^{おし}だ^{おし}ら^{おし}う^{おし}か……) ^{おし}次^{おし}の^{おし}瞬^{おし}間^{おし}、^{おし}ト^{おし}ット^{おし}ち^{おし}ゃ^{おし}ん^{おし}は、^{おし}ママ^{おし}の^{おし}腕^{おし}の^{おし}中^{おし}に、^{おし}飛^{おし}び^{おし}込^{おし}ん^{おし}で^{おし}来^{おし}て、^{おし}い^{おし}っ^{おし}た。「^{おし}ね^{おし}え、^{おし}今^{おし}度^{おし}の^{おし}学^{おし}校^{おし}

に、いいチンドン屋^やさん、来る^くかな？」とにかく、そんなわけで、トットちゃんとママは、新^{あた}しい学校^{がっこう}に向^むかって、歩^{ある}いているのだった。

Chapter3 新しい学校

学校の門が、はっきり見えるところまで来て、トットちゃんは、立ち止まった。なぜなら、この間まで行っていた学校の門は、立派なコンクリートみたいな柱で、学校の名前も、大きく書いてあった。ところが、この新しい学校の門ときたら、低い木で、しかも葉っぱが生えていた。「地面から生えてる門ね」と、トットちゃんはママに言った。そうして、こう、付け加えた。「きっと、どんどんはえて、今に電信柱より高くなるわ」確かに、その二本の門は、根っこのある木だった。トットちゃんは、門に近づくと、いきなり顔を、斜めにした。なぜかといえば、門にぶら下げてある学校の名前を書いた札が、風に吹かれたのか、斜めになっていたからだった。「トモエがくえん」トットちゃんは、顔を斜めにしたまま、表札を読み上げた。そして、ママに、「トモエって、なあに？」と聞こうとしたときだった。トットちゃんの目の端に、夢としか思えないものが見えたのだった。トットちゃんは、身をかがめると、門の植え込みの、隙間に頭を突っ込んで、門の中をのぞいてみた。どうしよう、みえたんだけど！「ママ！ あれ、本当の電車？ 校庭に並んでるの」それは、走っていない、本当の電車が六台、教室用に、置かれてあるのだった。トットちゃんは、夢のように思った。“電車の教室……”

電車で窓が、朝の光を受けて、キラキラと光っていた。目を輝かして、のぞいているトットちゃんの、ホッペタも、光っていた。気に入ったわ

つぎ しゅんかん
次の瞬間、トットちゃんは、「わーい」と歓声を上げると、電車の教室
のほうに向かって走り出した。そして、走りながら、ママに向かって叫んだ。
「ねえ、早く、動かない電車に乗ってみよう!」ママは、驚いて走り出した。
もとバスケットボールの選手だったママの足は、トットちゃんより速かつ
たから、トットちゃんが、後、ちょっとでドア、というときに、スカートを捕
まえられてしまった。ママは、スカートのはしを、ぎっちり握ったまま、トッ
トちゃんにいった。「ダメよ。この電車は、この学校のお教室なんだし、
あなたは、まだ、この学校に入れていただいてないんだから。もし、どうし
ても、この電車に乗りたいたんだったら、これからお目にかかる校長先生
とちゃんと、お話してちょうだい。そして、うまくいったら、この学校に通
えるんだから、分かった?」トットちゃんは、(今乗れないのは、とても残念
なことだ)と思ったけど、ママのいう通りにしようときめたから、大きな声
で、「うん」といって、それから、いそいで、つけたした。「私、この学校、
とっても気に入ったわ」ママは、トットちゃんが気に入ったかどうかより、
校長先生が、トットちゃんを気に入ってくださるかどうかが問題なのよ、と
いいたい気がしたけど、とにかく、トットちゃんのスカートから手を離し、
手をつないで校長室のほうに歩き出した。どの電車も静かで、ちょっと
まえ、一時間目の授業が始まったようだった。あまり広くない校庭の周
りには、塀の変わりに、いろんな種類の木が植わっていて、花壇には、赤や
黄色の花がいっぱい咲いていた。校長室は、電車ではなく、ちょうど、門
から正面に見える扇形に広がった七段くらいある石の階段を上った、
その右手にあった。トットちゃんは、ママの手を振り切ると、階段を駆け上
がって行ったが、急に止まって、振り向いた。だから、後ろから行ったママ

は、もう少しで、トットちゃんと正面衝突するところだった。「どうしたの？」ママは、トットちゃんの気が変わったのかと思って、急いで聞いた。トットちゃんは、ちょうど階段の一番うえに立った形だったけど、まじめな顔をして、小聲でママに聞いた。ママは、かなり辛抱づよい人間だったから……というか、面白がりやだったから、やはり小聲になって、トットちゃんに顔をつけて、聞いた。「どうして？」トットちゃんは、ますます声をひそめて言った。「だってさ、校長先生って、ママいったけど、こんなに電車、いっぱい持ってるんだから、本当は、駅の人なんじゃないの？」確かに、電車の払い下げを校舎にしている学校なんてめずらしいから、トットちゃんの疑問も、もっとものこと、とママも思ったけど、この際、説明してヒマはないので、こういった。「じゃ、あなた、校長先生に伺って御覧なさい、自分で。それと、あなたのパパのことを考えてみて？パパはヴァイオリンを弾く人で、いくつかヴァイオリンを持ってるけど、ヴァイオリン屋さんじゃないでしょう？そういう人もいるのよ」トットちゃんは、「そうか」というと、ママと手をつないだ。